報告

『大分県の石造仁王』

渋谷忠章

(一) はじめに

大分県が石仏をはじめとする石造品の宝庫であることは、これまでの多くの調査、研究書によって紹介されているとおりである。そしてこれらの中で、国東半島を中心に分布する国東塔は、地方色豊かな宝塔として美術的な価値も高く、早くから研究が進められている。

ところが、この国東塔と同じように国東半島を中心に分布し、しかも里人の根強い信仰によって、ごく最近まで受け継がれ造られたものに石造の仁王がある。

そしてこの仁王については、庶民芸術の代表作として一部に紹介されることはあるが、これが大分県を代表する石造品の一つとして研究されているものはないようである。

石造品については全くの素人の筆者であるが、ある切っ掛けによって石造仁王の調査を進めるようになり、その結果以外にも在銘のものが多く、仁王造立年代や造立の目的、さらに石工の系統についても予想以上に知ることが出来た。

従ってこの小論において、これまで調査した一部を紹介し、これからの研究に対するご助言を仰ぎたい。

(二) 石造仁王の分布

石造仁王は国東半島を中心として分布するが、雄山閣の『日本石仏事典』に「大分県国東半島が濃密で、百二十九対と一体が欠けた所が二ケ所確認されている。以下、東京十対、長野六対、神奈川四対、佐賀三対、群馬、埼玉、静岡、島根に各一対見られる。このほかに数は明らかでないけれども、川内市内に五対と対の一体の欠けたものが二体あり、明治初期の廃仏毀釈で破壊されたものを含めると鹿児島にも多数あるし、宮崎にも分布している」とあり、大分県が圧倒的に多くの分布を示している。

そしてこれまでの筆者の調査によれば、県下全域で約一五〇対には達するようであり、国東半島以外にも塗料事件のあった臼杵市深田の木原石仏や大分市、竹田市、直入郡久住町などにも分布している。国東半島では豊後高田市が最も多く

二十数例あり、真玉町、国見町がこれにつぐ。

次に、国東半島に多くの石造仁王が分布する原因について、大きくは次の二つの条件をあげることが出来る。その一つは、角閃安山岩や田染石と呼ばれる凝灰岩などの石材が豊富で、しかも容易に搬入できる条件にあったことである。他の一つは、明治初年の廃仏毀釈によって、神社における仏堂、仏像、仏具などの破壊や除去が行なわれるなかで、国東半島固有の根強い民間信仰によって里人に守りぬかれたことである。

㈢ 石造仁王の種類

仁王は梵名をバーラドハラ、金剛力士や密迹金剛ともいわれる。寺門の両側にたち、伽藍の守護神として安置されている。筋骨隆々とした上半身を露出し、片手に金剛杵を振りあげた忿怒形が通形で、向かって右側に口を開けた阿形、左側に口を閉じた吽形を配置している。ところで国東半島の仁王には、その配置が逆になっているものもみられるが、これらの大部分は当初からのものではなく、廃仏毀釈によって二次的に移されたものが多い。また顔の表情についても、忿怒形にほど遠く剽軽な顔や童画的な仁王も多い。さらに筋肉や天衣の表現もなく、手足や全体的なバランスが不均等なものも多くみられる。

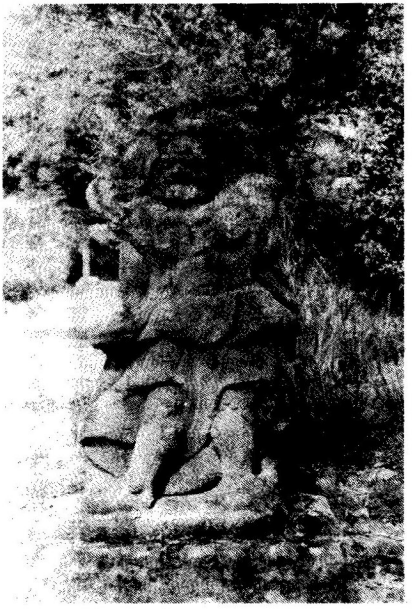
このように木彫仁王から想像される仁王のイメージとは全く異なるのが石造仁王の特徴でもあるが、それは村人の深い信仰によって守り育てられた庶民の芸術品だからである。

さて、このような石造仁王は次の三種類に大別される。

(1)「丸彫り仁王」

いわゆる独立した丸彫り仁王で、県内の大部分がこれに属する。古例では県の有形文化財に指定されている国東町岩戸寺仁王（挿図一）が文明十年（一四七八）の造立で、この種の在銘仁王としては全国で最も古い。逆に新しい例としては国東町安養寺仁王（挿図二）が昭和十三年の造立である。また豊後高田市白鳥神社参道の仁王も昭和十年の造立で、ごく最近まで石造仁王が造立されていたようである。

規模については、木彫仁王のような大きな仁王はみられないが、国東町初八坂社仁王（挿図三）は天衣や髻を欠損しながらも残存高二五〇㎝を測り、台石に乗った本来の姿は三ｍ



挿図一　国東町岩戸寺仁王（吽形）　（阿形）

挿図二　国東町安養寺仁王（吽形）　（阿形）

挿図三　国東町初八坂社仁王

を越え、県内で最大の仁王である。また小型の仁王としては大田村宝陀寺仁王が像高二九cmを測り、安岐町西白寺仁王も天衣と髻を欠損するが残存高三八cmと小さい。

またこの種の古例の特徴としては、髻の結び紐が左右に大きくなびき、裳先は長くして軽い感じを出している。さらに足先は両足とも外開きになっている。

挿図四　国見町旧千燈寺仁王（牛形）　（阿形）

(2)「半肉彫り仁王」

厚さ三〇cm～四〇cmほどの大きな板石に、正面の半分だけを表現した仁王で県内では数例を数えるが、造立年代を明確にするものは少ない。その中で国見町旧千燈寺仁王（挿図四）は、天衣を含んだ総高一八〇cmを測る。阿形像左手に持つ金剛杵は肩上に構え、右手は肘を曲げ掌を下に開いて腰にあてる。吽形像右手は肩のやや外側で掌を前にして開き、左手は腰にあてる。宙に舞う天衣は美しい曲線を描き、裳の表現も軽やかである。この種の仁王としては秀作であり、古式のものと思われるが造立年代は不明である。

その他では、真玉町応暦寺観音堂前、同町玉泉寺、香々地福田寺、同町日枝神社、同町霊仙寺山門前などにみられる。しかしこれらの全ては、手足のバランスや全体的な表現方法も幼稚である。さらに顔は剽軽な表情をし、筋骨隆々といった仁王の力強さは全くない。

このような仁王は、この地域独得のものとして興味をもつが、これらの石工と丸彫り仁王の石工とがどのような系統をもつのか、さらにこれらの造立年代など今後の研究課題は多い。

(3)「磨崖仁王」

この種の仁王は臼杵市深田の古園石仏群、安心院町楢本磨崖仏、緒方町宮迫東石仏群などに立像がみられる。中尊に大日如来が安置され、特に古園例は後世の室町時代の作といわれている。吽形像は崩落し阿形像のみが残存するが、顔は目が丸く忿怒の表情や全体的な力強さが良く表現されている。同じ室町時代の作といわれる木原石仏とは技法的にも異なり中央の仏師の技法を受け継いだ作風を感じる。

(四) 仁王の所在と配置

伽藍の守護神として安置される仁王は、神社守護を目的として安置されている例も多い。ところが神社に安置された仁王の多くは、明治初期の廃仏毀釈によって、近くの寺院に移されることで難を逃がれた。

安岐町大儀寺仁王は、像高二〇〇cmを測り、宝暦十年（一七六〇）の造立で、石工は豊後高田市田染の松本儀平次、同住伊曽七とある。以前は近くの瀬戸田八幡宮に安置されていたが、明治五年現位置に移された。その他にも国見町大光寺仁王が武多津神社より、香々地町施恩寺仁王が別宮八幡宮

より、真玉町真玉寺仁王が真玉八幡宮からなど多くみられる。

また、国東町初八坂社仁王は、動かされる運命となり境内の外にまでは運んだものの、像高二五〇cmを越す巨体を動かすことは大変な作業であり、現在は隣接する中央保育園の門柱のごとき役割をしている。台石だけが境内に残り、天衣や顔の一部が欠損するのはその時に生じた傷であろう。

さて、六郷山寺院の大部分は神仏習合によって境内に神社を有する。その多くは六所神社であるが、両所、妙見社、熊野権現も存在する。従って寺域内に二対の仁王が配置されることもある。

安岐町両子寺は、表参道の仁王門跡と護摩堂をやや登った両所神社参道入口に安置されている。両像とも銘はないが、前者は文化十一年（一八一四）の造立といわれ、後者は岩戸寺仁王にやや似た古い感じの仁王である。

国東町成仏寺は山門前に二対の仁王が安置されている（挿図五）。像高が一mをやや越える程度の規模で、共に田染石と呼ばれる凝灰岩によって造られている。造立年代は天保二年（一八三一）と文政二年（一八五五）であるが、短い参道に二対安置されるのは不自然で、おそらく一対は本堂の左方に位置していた妙見社に安置されていたものと思われる。また、香々地霊仙寺、真玉町応暦寺では一対が丸彫りで、他の一対は半肉彫りという組合せである。応暦寺の場合

挿図五　国東町成仏寺仁王

は、山門前に享保十三年（一七二八）、宇佐の石工露田好昌によって造られた丸彫りがあり、観音堂前に江戸時代初期の作ともいわれる半肉彫りの仁王がある。剽軽な顔をし、以前は奥ノ院に安置されていたらしい。霊仙寺の場合は、山門の両側に半肉彫りの仁王があり、境内に嘉永七年（一八五四）、板井法橋国良作の丸彫り仁王が安置されている。

ところで国見町常光寺には、参道入口から奥庭に至るまでに四対の仁王が存在する。造立年代は参道入口から順に、①文化四年（一八〇七）―②天保十年（一八三九）―③安政四年（一八五七）―④天保十年となっている。①は像高一四〇cmを測り、髻は単髻で地髪部の髪際が厚く表現されているために帽子でもかぶっているようである。忿怒相や筋肉の表現はなく、足膝をまげてやや前かがみの姿勢を呈しており、何となく頼りない仁王である。②、③、④については、村長亀井武左工門、山ノ口亀井彌六と記されており、何か事あるごとに寄進されたものであろう。

㈤　仁王の変遷と造立の目的

仁王の変遷については、まだ十分な研究が進んでいないが、丸彫りの在銘仁王として最古の例が岩戸寺仁王であることは間違いないようである。しかし無銘仁王の中にも、国東町文殊仙寺仁王（挿図六）のように、像高一八〇cmを測り、胸骨等を珠数玉状に表し、足先の向きや全体的な表現から、室町ないしはそれ以前の年代を考えられるものもある。また臼杵市深田の木原石仏、同古園の磨崖仁王等も室町時代の造立と推定されている。さらに両子寺両所神社参道の仁王も、両足先を側方に開き、天衣や裳等の表現から室町時代の作と考えられる。

ところが十六～十八世紀代の仁王は極めて少なく、十九世紀初頭以後になって爆発的な増加をする。そして明治以後になると仁王は本来の目的を失われ、しだいに衰退の傾向を示すが、昭和十三年造立の国東町安養寺例まで継続される。

さてこのように長い年月にわたって造立された石造仁王も、江戸時代後期以後になると伽藍や神社の守護としてだけでなく、五穀成就、村中安全、諸人快楽、さらに武運長久や病気快復等のあらゆる目的によって造立される。

豊後高田市富貴寺の入口にある財前国富氏所有の仁王は、以前は富貴寺谷ノ坊に安置されていたもので文化四年（一

挿図六　国東町文殊仙寺仁王

八〇七）の造立であるが、「海上死三人為菩堤」とある。すなわち供養のために造立された仁王である。

安岐町放生庵仁王（挿図七）は、像高一mほどでいかにも寂しげな表情をしている。

挿図七　安岐町放生庵仁王

の近くに住む九才の子どもが目の病いにかかり、その快復祈願のために寄進されたといわれる。

最も新しい安養寺仁王は、「祈願国威宣陽皇軍武運長久」とあり、緊迫した国際情勢のなかで、我が国家の安全を祈願して寄進されたものである。

髻は単髻で、天衣の中ほどは首にかかってショールのようである。阿形、吽形像とも金剛杵を持たず、両手を挙にして腰にあてる。胸骨や筋肉の表現もなく、顔は目が印象的でむしろ閉じているようである。造立の目的については、約一〇〇年ほど前に、庵

(六)　石造仁王の石工

仁王の石工については、以外にも多く確認することが出来

たが、そのうちの何人かを紹介してみたい。仁王の石工といっても、当然仁王だけを造るのではなく、地蔵像、燈籠、観音像などあらゆるものを手がけている。香々地町堅来八幡社仁王の石工である板井法橋国光は、天保年間に真玉町無動寺の薬師如来や十二神将の修理を行なっている。

国東町安養寺仁王の石工は、阿形像背面に「向田松男作」とあり、台石には「ワラミノ佐戸正男」とある。即ち仁王の石工と台石の石工は別人である。また「松男」は国見町向田の人で、本名は猪野松男である。そして香々地町夷の六所権現社前の狛犬に、「彫刻師猪野松男」となっており、彫刻師と称していたようである。

国見町胎蔵寺仁王（挿図八）は、大正五年同町伊美の久保田鶴松によって造られたものである。彼は臥牛像、観音像、陰陽石、地蔵像など多くの作品を残しており、この地域の名工であった。

仁王は像高一八五cmを測る。筋骨隆々とし、忿怒した顔に大金剛杵を持つ姿は迫力がある。住職の話によれば、原石を寺の裏山から切り出し、その時点である程度の形を整えて山門前に運ぶ。そして細部の彫りにかかるが、彼はモデルとし

（牛形）

挿図八　国見町胎蔵寺仁王（阿形）

て東大寺南大門の仁王を採用した。写真を横に、前に鏡をおき、自らがその仁王の形となり、鏡に写った力の入りぐあいを観察しノミを手にしたそうである。ところが鏡に写ったまま彫った仁王は、向かって右に阿形、左に吽形とする本来の位置におけば、足や目は外向きになり腰のひねり具合も逆になってしまった。従って仕方なく、右に吽形を左に阿形を置かざるをえなかったという鶴松失敗作の仁王である。

次に国崎町浜崎の石工佐藤茂助政近について紹介してみよう。彼は石工だけでなく大工の棟梁としても多くの名作を残している。また鍛冶屋もやったそうである。伊美の別宮社を建てる前に国見町古江の岩倉社を建てたが、やってきた茂助をみると大工道具らしいものはあまり持っていない。これでお宮が建てられるのかと心配していたら、やがてその場でふいごを吹き、ノミ、カンナを造り、それを使って仕事にかかったので村人一同は大いに感心したといわれる。

さて仁王については、国東町三十仏仁王、初八坂社仁王、禅林寺仁王、秋葉社仁王と四体を手がけている。

三十仏仁王（挿図九）は、像高一七二cmを測り、文政五年（一八二二）の造立である。筋肉の表現もよく、両足をやや

挿図九　国東町三十仏仁王（吽形）　（阿形）

広げて腰より下に重量感をもたせている。そしてそれぞれの細部にまでノミのあとがあり、県内でも最も装飾的な仁王である。台石には石工、安田九助・佐藤茂助とあり、おそらくこの両者は師弟関係にあったものと思われる。

禅林寺仁王は、現位置とは反対方向の旧参道にあったものを、台風災害によって昭和三年現位置に移したものである。像高二一〇cmを測り大型の仁王である。

初八坂社仁王は、前述したように像高の残存が二五〇cmを測り、県下で最大の石造仁王である。

以上の三体は、規模も大きく重量感に富んだ仁王である。特に初八坂社と禅林寺の仁王は規模や容姿が良く似ており、一見しただけで同じ石工の作品であることがわかる。しかし技法的には、三十仏仁王のような眉毛の一本一本にまで細い表現をするような装飾性はなく、むしろ簡素な仁王といえる。

ところで、安田九助、佐藤茂助の共同作品に文殊仙寺前仁王前の灯籠がある。文政二年（一八一九）の造立であるが、竿の四隅に獅子を彫り、その四本の足をもって基礎に座る。装飾的であり、全体的な均整にもすぐれている。

また三十仏仁王の前にも灯籠があり、仁王と同様文政五年の作品であるが、これは茂助による作品である。竿から基礎にかけてはかなり装飾的な技法を示しているが、文殊仙寺の灯籠には及ばない。

さらに国見町大熊毛日吉社にも茂助による灯籠（挿図十）があり、これは天保五年（一八三四）の造立で、茂助生涯の大作ではなかったろうか。基礎部分は自然石を手水鉢としたもので、その部分にも龍や獅子を彫りこんでいる。また竿の部分にも獅子を大きく浮き出させ、豪華で見事な灯籠である。

挿図十　国見町日吉社燈篭

このように仁王と灯籠についてみると、文殊仙寺の灯籠や三十仏仁王のように安田九助、佐藤茂助の二人による作品は、緻密な装飾的技法がみられる。そしてその技法は茂助に継がれ、国見町日吉社の灯籠のごときすぐれた作品を完成させている。しかし仁王については大型化するものの技法的には簡素であり、茂助の作風の一部を知ることができる。

㈦　おわりに

以上、大分県の石造仁王についてその一部を紹介したが、その他にも石質の問題や造立の目的などに多くの課題が残されている。したがってさらに研究を必要とすることを十分に感じつつ稿を終りたい。

（大分県教育委員会文化課）